

平成21年1月10日

14 日本一長い校歌は？

伊藤 長七 長野県出身 東郷師38卒  
在職39(大8) 都立小石川高校視代校長  
日本一長い校歌は、どここの学校であるかをインターネットなどで調べると、必ずその中に、長野県の諏訪清陵高校の校歌が出てきます。それは、八番まで載せられています。その他も調べると、都立小石川高校(現・小石川中高等学校)の校歌も出てきます。それは、十二番まであり、どれが日本一であるのか、その他の学校でもっと長い校歌があるのか、最後まで調べていませんが、この二つの学校の校歌の作詞者は伊藤長七で、戦前には異色の教育家・名物男とも呼ばれる人物でした。

伊藤は、長野県諏訪郡に生まれ、明治27年、長野師範に入学しましたが、その時から遺憾なくその本領を發揮しました。それは、学生の身分ながら、幾度も学風改革運動の先頭に立ち、県教育界の革新を唱え、県下小学校長を集めて、その面前で教育界の沈滞と教育者の無神経を痛罵する大演説をぶったこともありませぬ。その時の彼の同級生には、歌人の太田水穂、作家・歌人の島木赤彦などがあります。伊藤は、長野師範を卒業すると、上諏訪の小学校に奉職しますが、生徒とともに雪中行軍をしたり、当時まったく他では行われていなかった女子生徒に鉄棒をやらせたり、また、彼の提唱で郡内運動会を開いたりしました。そのような教員であった伊藤の感化は全校生徒に及び、朝、白い袴をつけ握太のステッキをついた伊藤先生の姿が校門に現れると、全校生徒が一斉に万歳を絶叫、歓喜して迎えたといわれています。しかし、周囲は、このような教員をいつまでも許すわけはないう。在職1年で下諏訪小学校へ、さらに半年で岡谷市へ、またまた半年で小諸の小学校へと転勤させられました。しかし、そこでも校長排斥運動をおこし、学校を辞めさせられることになりました。そこで、伊藤は活路を

求めて東京高等師範学校への入学を決意し、『小諸を去るの辞』を残し、明治34年、東郷師へ入学することとなりました。

東郷師を卒業すると、一年間、私立の講師を勤めた後、附属中学校の教官となりました。その附属在職中、伊藤の名を一躍教育界に高らしめた事件が起こりました。それは、東京朝日新聞文化欄に「黒風白雨楼」の名で「現代教育論」と題する教育論文が連載され、内容は女子教育や教育行政を痛烈に批判したものであり、筆者が果たして何者であるかというものでした。やがて、それが附属中の一教官である伊藤と分かったとき、世人は一様にその卓見と才筆に驚きの声をあげました。

ところで、そのころ、東京には都立の四つの中学校がありました。その志願者が六倍というもので、その入学難緩和が必要であり、また、理化学教育の重視も考慮され、五中(後に小石川寛校)が計画されました。そして、その校長として、白羽の矢が立ったのが伊藤です。校長となった彼は、水を得た魚の如く、新しい学校経営を次々と打ち出しました。

その一は、英国のイートン校などの名門にならって、生徒に紳士としての自覚をもってもらいたいということで、背広にネクタイの制服を制定しました。第二は、停学や謹慎などの罰則は一切なしということにしました。出席も毎時間の点呼はなく、学期末に休んだ日数を報告すればよい、というものでした。

第三は、入学試験に、田中寛一(附属中学校長)の指導を受けながら、メンタルテストを実施したこと。第四は、男子中学ではじめて女子教諭(国語の栗山津禰)を採用したこと。その他、まだまだ彼の新しい学校経営がありますが、これらのことが、五中、ひいては小石川高校の伝統的な明るい自由な校風をつくりました。

また、彼は、校長在職中、よく外

遊もしました。少年少女の手紙一万余千通を携えて、欧米各国で配ったり、あるときは、学校にも家庭にも文部省にも音信不通で消息を絶ったまま、北米から南米のアマゾン、更にヨーロッパを廻り、シベリア経由で帰国したこともありました。このような伊藤でしたが、昭和5年、肺炎のため、校長在職のまま亡くなりました。その校葬には、数千人の会葬者が五中の校庭にあふれました。

その後、小諸には、東郷平八郎の揮毫による伊藤寒水碑(伊藤は後年、寒水と称した)、裏面には、「小諸を去るの辞」が彫られたもの、諏訪には、附属中関係者もまじえた「伊藤長七先生頌徳公園」の建設、「開拓創作」二基の記念碑が建てられたりしました。日本一長い校歌は、いずれも伊藤の関係した学校などに残っているものです。なお、伊藤の息子、長男は功で附属在学中に病死しましたが、次男国男(33回)は練馬病院長、四男晴(41回)は中教出版社長などを勤めています。また、島崎藤村作『破戒』の土屋銀之助という教師は、伊藤長七がモデルです。

著溪会編『著溪人物誌』講談社 昭和47矢崎英彦著『寒水伊藤長七伝』鳥影社2002 写真は、長野県諏訪市にある「寒水伊藤長七先生頌徳公園」のもの・矢崎著より



15 鳥取県の教育のために

三木 順治 兵庫県出身 東郷師40卒  
在職40(大4) 倉吉高校長

三木は、兵庫県龍野中から東京高等師範に入学し、卒業後すぐに附属中の教官となりました。三木の授業の内容や、附属中を辞めてからどこかの教員になったのかなどについてはわかりません。ただ、教員は続けたらしく、昭和2年の名簿では、鳥取米子中の校長を、その後、倉吉高校の校長などを勤め、鳥取県の教育界で活躍したことが知られています。